

*ONE HUNDRED YEARS LEYBOLD*

レイボルド 100年の歩み

---

1905~2005

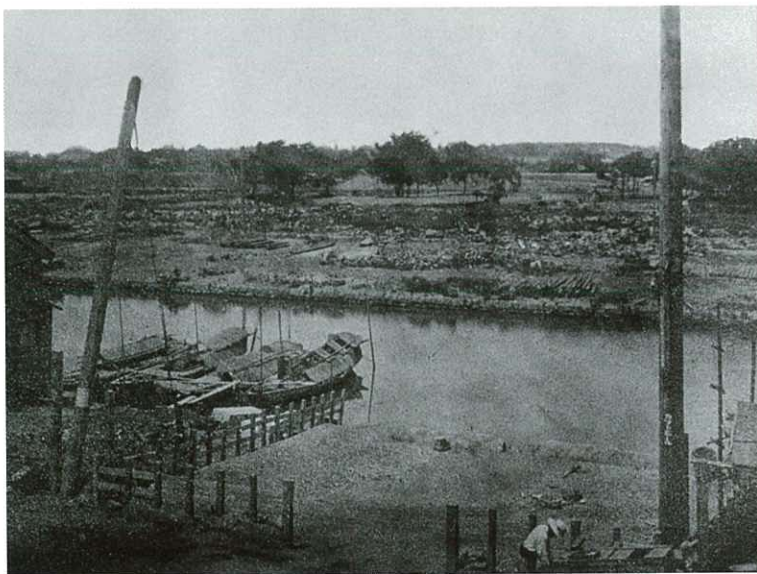






レイボルド株式会社

それは、100年前に始まった。



明治39年(1907年)檜物町(現在の八重洲口)にあったレイボルド商館(レイボルド機工株式会社)の事務所より写す。ここは後の東京駅、中央郵便局及び丸の内ビルディングが建てられた。  
(写真:クルト・マイスナー)

**ア**ウグスト・エバース氏が初めて日本の地を踏んだのは幕末動乱の1862年、外国人排斥の風潮が広がりを見せていた時代であった。そんな中この国に敢えて飛び込んだ彼の心には、危険を顧みない野心と成功への希望があったのであろう。後にハンブルグ・横浜・神戸でシモン・エバース商会を創設、そして1905年の春、若き技師ルドヴィッヒ・レイボルド氏に更なる発展を託し、創立されたのが当社「レイボルド株式会社」の前身となる「エル・レイボルド商館」である。この東京八重洲口の地に産声を上げた当社が、日本の貿易商社の草分けとして、日本産業の発展に大きく寄与して往くこととなるのである。







## ~1905

1600年代、ヨーロッパはカトリックとプロテスタント勢力の苛烈な争いで分裂の危機に瀕していた。そしてヨーロッパ以外の全ての大陸を手に入れる為、白人の植民地勢力がアジア、アフリカ、新大陸などを次々と征服していった。日本においては各地の領主達が数百年にわたり領地の支配を巡って争いを続ける中、白人の宣教師が日本に入国し、キリスト教が広まっていった。

戦国大名の権力闘争の末、徳川家が勝利を収め、他の大名家と圧制的な条約を力づくで結んだ。又、外国からの敵に対応する為、日本は鎖国を行い、外国人は追放されキリスト教が排除された。

徳川家は将軍(軍事的な摂政職)として国を支配し、厳しい独裁制を強いた。

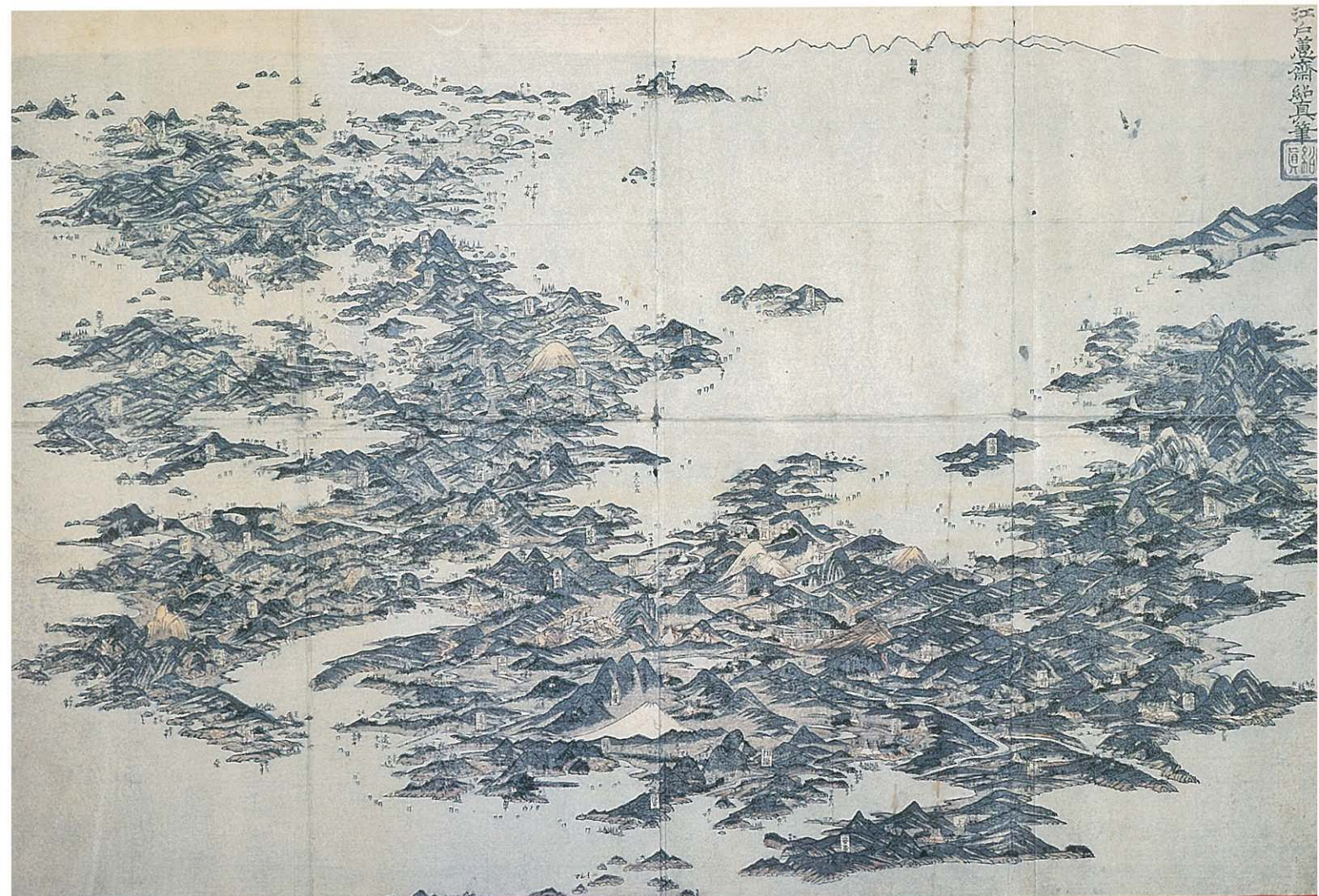
しかし鎖国政策のもとに於いても、外国に対してなお1つの窓口が開かれていた。長崎には出島がおかれ、中国及びオランダと貿易を行い、情報の収集も行われた。

争いの時代が終わると日本国内では農業と商業が栄えた。100万の人口を超える大都市や領地の豊かな商人の間では芸術が盛んとなり、諸大名と侍の間では高潔な武士道が求められた。

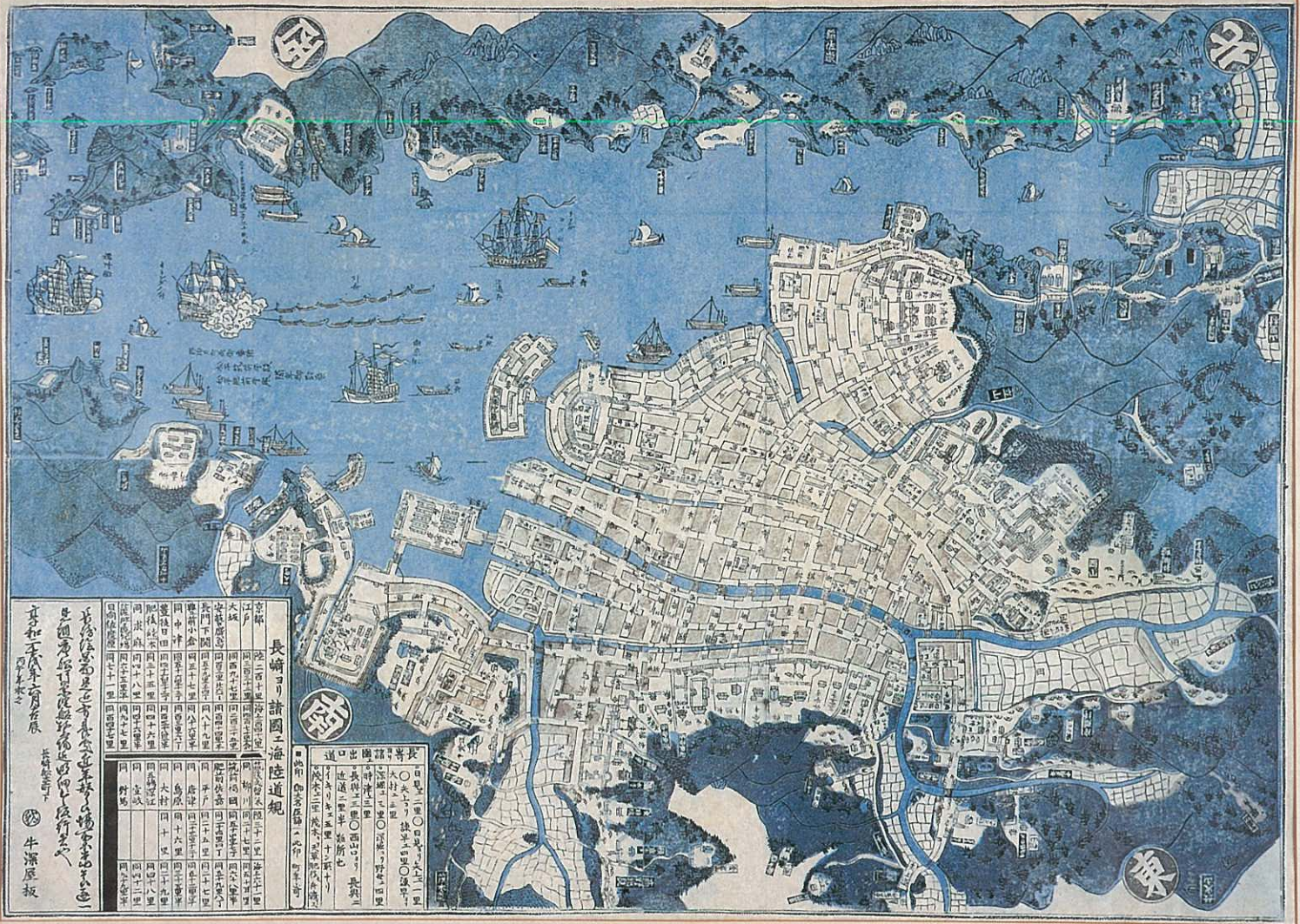
国は平和になり、人々は貧しくとも慎み深く生活し知識に渴望していたが、徳川幕府による厳しい知識吸収の規制が行われ、重圧を感じていた。

1853年、日本にもとうとう外部より脅威がもたらされた。アメリカから近代的な軍艦が江戸(現在の東京)に押し寄せ、日本に開国を迫った。他の大国もすぐにそれに続いた。

江戸葛飾結真筆







その為幕府は一方的な条約を次々に呑まなければならない、日本は救いようのない窮地に追い込まれた。ここに至り、徳川家の250年に及ぶ専制政治は弱体化し滅亡することとなった。

1868年、明治天皇の下で新しい政府が日本の統治を引き継ぎ、指導者として勤皇の有能な人材が登用された。日本は失われた時間をすぐに取り戻し始めた。鎖国から生じた各国との産業レベルを埋める為に、ヨーロッパ及びアメリカから様々な重要な分野で高度な資格を有する教師が日本へ招聘され、厳正な審査によって選りすぐられた多くの生徒が彼等から熱心に知識を吸収し始めた。それからわずか30年後には、日本は軍事を含めほとんどの重要な分野において近代化時代に入った。

1904年には、わずか50年前に中世の武士時代から目覚めたばかりの小国日本と大国ロシアとの間で日露戦争が勃発した。

日本はまず旅順港とウラジオストック港にいたロシア海軍の艦隊を壊滅し、次に朝鮮と満州にいるロシア軍に勝利した。

そして、有名な対馬海戦(29/5/1905)で、ロシアのバルチック艦隊をも撃破。

和平条約によってロシアは樺太の南半分を日本に割譲しなければならなかった。ロシアは朝鮮を完全に日本に引き渡し、満州からも手を引く事になった。

日本は更に拡張を続けた。軍事的な成功によって工業力の増加が緊急に必要となり、もはや工業製品をアメリカとイギリスだけに頼る事はできなくなった。

- 1841  
アウグスト・エバース氏、ハンブルグにて生誕。
- 1862  
アウグスト・エバース氏、長崎(出島)に初来日。
- 1866  
ルードヴィッヒ・レイボルド氏、アウスブルグにて生誕。
- 1868  
アウグスト・エバース氏、神戸のエル・クニッフル商会の株主になり、プロシアと北ドイツ同盟の神戸における名誉領事となる。



レイボルドの創立者である技師ルードヴィッヒ・レイボルド氏は**1866**年に生まれ、**1895**年から日本で生活し、横浜でシモン・エバース商会に勤務していた。シモン・エバース商会は動乱の幕末期から**1868**年までの開拓期に日本製品の貿易に従事していた。

**1905**年の春、日本の工業発展に尽くす為、レイボルド氏はシモン・エバース商会と共同の上、東京八重洲口の地に「レイボルド商館」(以下レイボルドと称す)を創立。

アウスブルグ出身のレイボルド氏はかつてMAN社に勤務していたなど、ドイツの工業界と深いつながりを持ち、この重責に正にうってつけの人物であった。

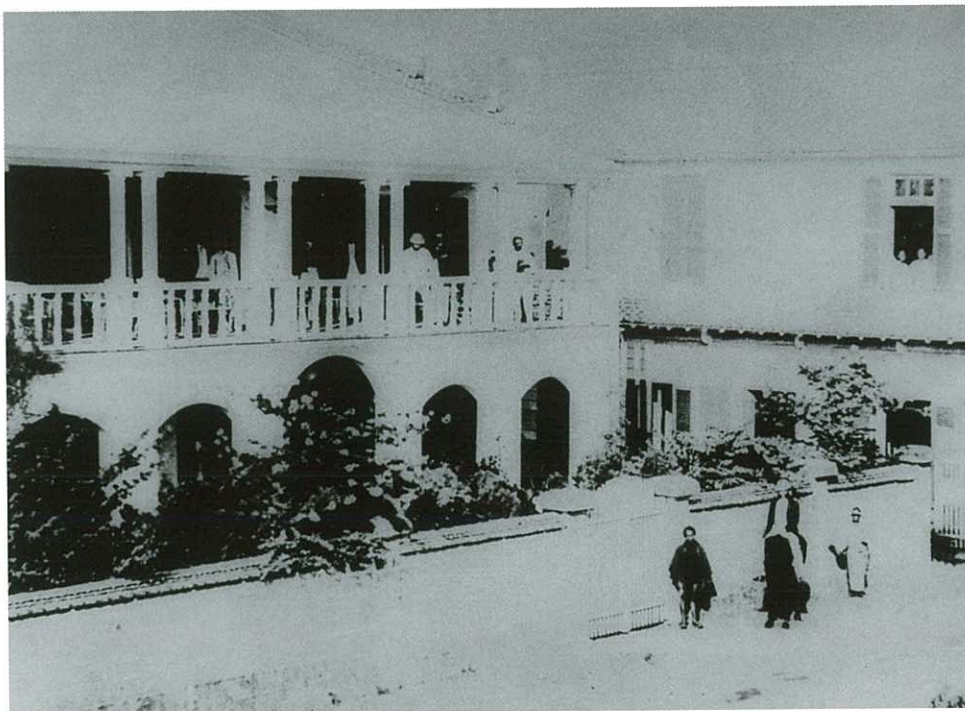
レイボルドは訓練された優秀な日本人スタッフをも有し、日本の貿易商社の草分けとして産業の発展に寄与していった。

当時、日本の大都市以外では電化が始まったばかりであった。電化は勿論日本の工業化を達成する為の必要条件であった。

レイボルドは日本中の小都市で小型の発電所を建設した。エネルギーは地元の環境条件によって、時には水力タービンを、時にはディーゼルエンジンを使用した。

レイボルドによって輸入機械が据え付けられ、それらを操作する為には地元のオペレーターに対する研修が行われた。その結果、地元の投資家との良好な関係を築き上げ、レイボルドは織物工業と造船の2つの分野にも参入する事になる。

日本は欧米に対し、非常に低価格の様々な品質の織物を出荷する一大輸出国へと急速に成長した。この成功によって日本は輸入に必要な資金の調達が可能になり、近代的な商船と世界水準の軍艦の建造で、造船国としても徐々にトップランクに昇っていった。



安政6年(1859年)横浜港開港以前は、外国人は総て長崎港の出島に住まなければならなかった。本図はアウグスト・エバース氏が文久2年(1862年)か同3年(1863年)頃、自宅からエル・クニッフラ商会へ乗馬で通っている処を示す。エバース氏はその後横浜及び兵庫に於いてエル・クニッフラ商会のパートナーとして勤務し、駐日ドイツ名誉領事となる。明治6年(1873年)ドイツ・ハンブルグにシモン・エバース商会を創設した。

● 1873

アウグスト・エバース氏と彼の友人ユーリウス・シモンにより、横浜に「シモン・エバース商会」が創設される。(後には、神戸にも展開)

● 1885

クルト・マイスナー氏、ハンブルグにて生誕。

● 1895

ルードヴィッヒ・レイボルド氏、ドイツの工作機械製造の技師として初来日。





アウグスト・エバース氏

1841年4月22日にハンブルグ市に生まれ、1904年6月2日神戸に於いて没。1862年(文久2年)に来日、長崎と横浜でエル・クニッファー商会のパートナーとして勤務。1868年(明治元年)に神戸でプロシヤ並びに独乙連邦の名譽領事となる。1873年(明治6年)1月2日にその友人ユーリウス・シモン氏と一緒に、今猶ハンブルグ市に存続するシモン・エバース商会を創設し、1920年迄は横浜と神戸に店を構える。1905年にルードヴィッヒ・レイボルド氏がレイボルド商館(旧名)の創立に資本を投じて以来、レイボルド社とシモン・エバース社は友好的に、又資本的に密接な関係を結んでいる。



ルードヴィッヒ・レイボルド氏

1866年アウスブルグに生まれる。明治28年(1895年)ドイツの工作機械製造の技師として初来日し、横浜のシモン・エバース商会に勤務。1905年の春、シモン・エバース商会の協力を得て、東京八重洲口の地に「エル・レイボルド商館」を創立。かつてMAN社に勤務していたレイボルド氏はドイツの工業界と深いつながりを持ち、日本の貿易商社の草分けとして日本の工業発展に尽くしたが、この2年後、明治40年(1907年)7月、惜しくも41歳の若さで死去。横浜の外人墓地に葬られている。



クルト・マイスナー博士

1885年3月9日ハンブルグに生まれる。1906年来日し、1907年創設者レイボルド氏の死去に依りレイボルド商館の総支配人となる。氏の経営の下でレイボルドは飛躍的な発展を遂げる。特に1928年にOTTOR-EIMERS社の工作機械部門を吸収した事は顕著な業績である。1923年の関東大震災及び第2次世界大戦と、2度に至って会社の全資産を失ったにも拘わらず、その優れた手腕をもって危機を克服し、現在の輝かしい礎を築いた。又、日本文化をヨーロッパに紹介した秀れた功績に依りハンブルグ大学より名誉博士号を授与され、日独両国政府より叙勲もされている。1964年、55年間に至った社長の職を辞し、故郷のドイツに帰国後も、1976年8月13日、満91才の生涯を終える迄レイボルドの会長の職にあった。



1907年7月、エル・レイボルド氏は残念ながら41才の若さで亡くなった。(彼は横浜の外人墓地に眠っている。) 横浜に住んでいたシモン・エバース商会のクルト・マイスナー氏がこの重要な創立期に二代目社長に就任、彼の仕事を引き継いだ。



明治40年(1907年)エル・レイボルド商館は東京檜町外堀の角の二階建家屋に移転し、大正2年(1913年)同社は隣家の三階建家屋に移転した。大正12年(1923年)9月1日の関東大震災のため同家屋は焼失した。

● 1902

クルト・マイスナー氏、ハンブルグの「シモン・エバース商会」の見習工となる。

● 1905

ルードヴィッヒ・レイボルド氏、「シモン・エバース商会」の資本金に依り、「エル・レイボルド商館」を創立。

● 1906

クルト・マイスナー氏初来日、横浜の「シモン・エバース商会」に入社。

● 1907

ルードヴィッヒ・レイボルド氏、横浜にて没、横浜の外人墓地に葬られる。クルト・マイスナー氏が、「エル・レイボルド商館」の二代目社長に就任。



レイボルドにとって鉄鋼製品のビジネスが重要となり、シームレスパイプのローリングミルを日本国内に初めて納入した。日本におけるビジネスは徐々に拡大していった。レイボルドは早い段階から日本における多くの建設にも携わってきた。ドイツから取り寄せた図面に基いた製鉄所の高炉の建設がすぐに業務の一部となった。ドイツで購入した図面を使いレイボルドのエンジニアが事業を指導した。適正な価格で組立ラインが作られ、日本の下請業者との緊密な関係が数十年にわたり続いた。

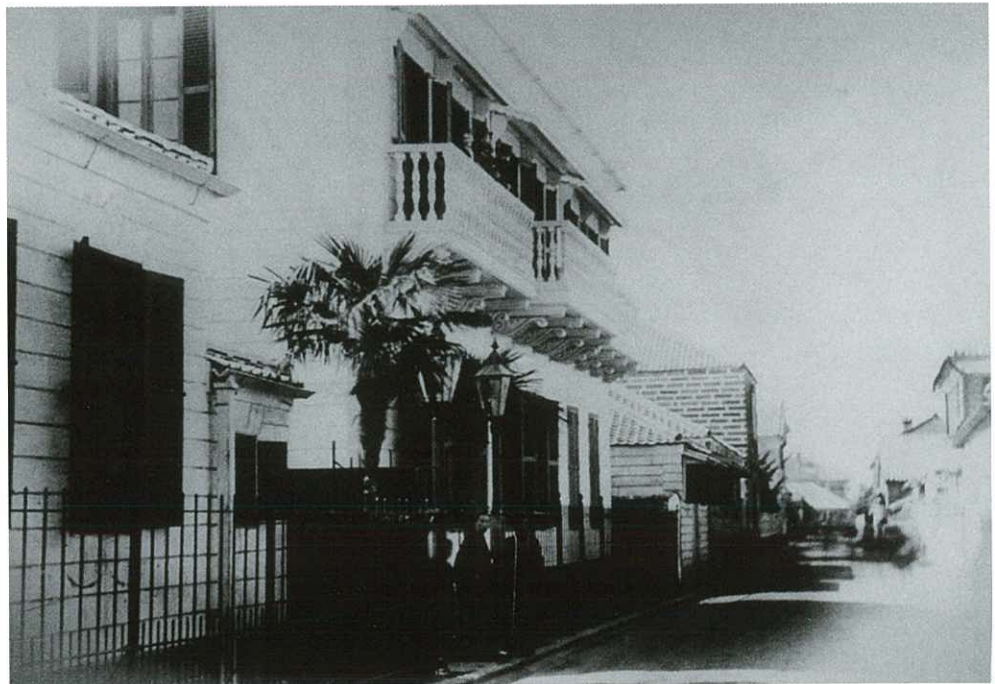
1910年から完全に日本の支配下に置かれた朝鮮もまた、日本の工業化のブームに加わった。朝鮮の農村に住む何千という勤勉な女性が織物工場で働いた。



しかし1914年から1918年に勃発した第一次世界大戦により、これまでの素晴らしい開発が崩壊した。日本は同盟国の1つであるイギリスと条約を結んで、南太平洋におけるドイツ領であった中国の青島を短期の軍事行動をもって獲得した。

当時クルト・マイスナー氏は青島にドイツ兵として駐留していたため、後に日本軍の捕虜となり四国の収容所に収容された。

ドイツ系の商社であったレイボルドは大戦中全ての業務を一時期停止する事を余儀なくされた。



シモン・エバース商会の事務所は明治6年(1875年)から大正9年(1920年)迄、横浜の25号館にあった。三つのバルコニーの真中の処に立っているのが、アウグスト・エバース氏夫妻である。同家屋の玄関の右側が輸入部で、同左側が輸出部であった。

日本はこの戦争によって利益を得たものの、やがて支配した中国の中で弱体化したので、結果的にイギリスとアメリカとの争いが増える事となる。



第一次大戦後のレイボルドの再建は短期間の中で順調にスタートした。国内のアドバイザーやサプライヤー等多くの日本人の同志が再びレイボルドの業務に参加し、かつての日本人従業員もすぐに戻ってきた。

そんな矢先、1923年9月1日、関東を大地震が襲った。大都市は壊滅され多くの犠牲者が出た。しかし破壊された都市の再建もまた経済の駆動力へと変わっていった。レイボルドは1911年から技術部で暖房装置(後に冬、夏用のエアコン)の設計と取り付け業務を行った。

● 1914~1920

第一次世界大戦勃発。戦争及び、「敵国との貿易」禁止に依り、社業活動無し。

● 1920

クルト・マイスナー氏、スタインフェルド氏、ファリアン氏らと共に、「エル・レイボルド商館」で事業再開。横浜と神戸の「シモン・エバース商会」は閉鎖されたが、ハンブルグの「シモン・エバース商会」は、「エル・レイボルド商館」の代理店であった。



この技術部によって三越デパートに国内で初めて大型エスカレーターが納入され、長年にわたり保守業務を行った。



1920年代になると工作機械ビジネスが盛んになった。日本の軍事化がその理由の1つであった。大戦に敗北したドイツは経済危機に瀕していたが、幸いにもレイボルドから大量の注文を受ける事になった。

レイボルドによって満州と中国に工場が建設され、訓練された中国人女性が日本向けの製品を作った。賃金格差によって、当時においてもアウトソーシングが行われた。

更に、満州は原料の主要な調達源でもあった。例えば、耐火レンガが非常に安価で生産され、鉄鉱石や高品質の

石炭も採掘された。長い冬期は雪に見舞われるものの、大河によって十分な灌漑が可能であった為に、平坦な満州の開墾地では農産物も記録的な収穫があった。又、広大な森林では最高品質の材木が伐採された。

レイボルドは満州の各都市に多数の技術部門を持つ事務所を置いた。



1931年、日本は満州を完全に支配下に置いた。

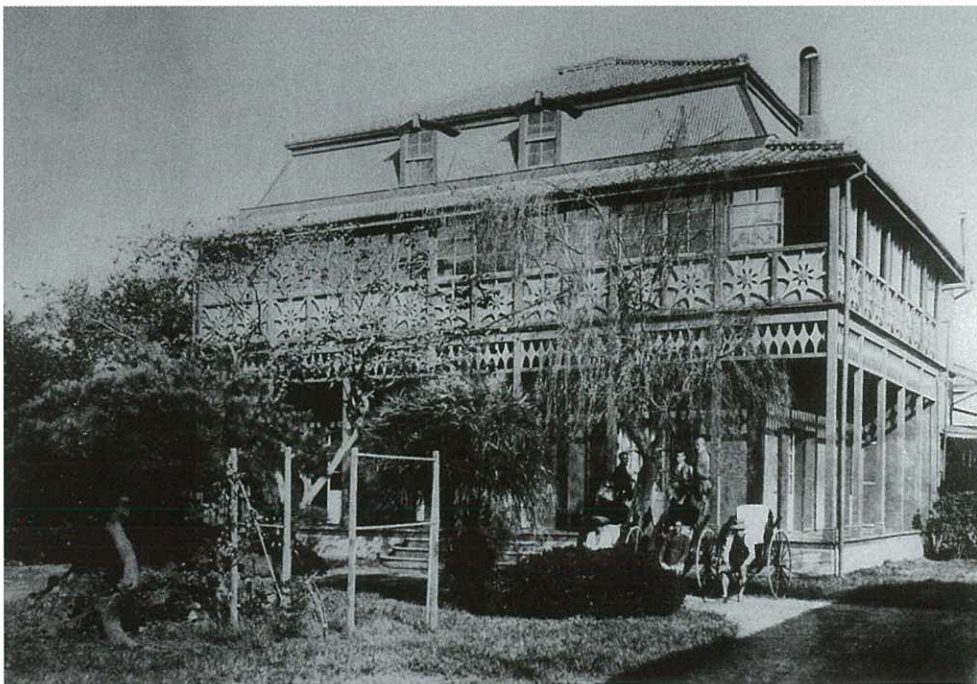
もとの中国の清王朝の皇帝が満州国の皇帝になった。そして皇帝の弟は将来の満州国の安寧の為に日本の皇女と結婚された。中国は分裂し弱体化しており、この情勢を止める事はできなかった。アメリカとイギリスは度々日本に

抗議し、日本との関係が悪化した。疑いもなく、日本は満州を巨大な工業地帯に変えた。又、満州は最高品質の農産物の記録的な産出国となった。

レイボルドは鞍山製鉄所の建設に関わり、世界最高水準の能力をもつ最新型の溶鉱炉をドイツより納入した。

日本国内においては、レイボルドはドイツの技術によって最新型の水処理施設を建設した。この部門(現在の水道機工株式

会社)だけで従業員は100名を超えた。特に重要な塩素供給装置はレイボルドによって、ドイツとのライセンス契約に基づいて製造された。



ルードヴィッヒ・レイボルド氏住宅  
(東京築地51番地)

### ● 1929

ファリアン氏、会社を辞職してドイツに帰国。「エル・レイボルド商館」は株式会社となる。マイスナー氏、スタインフェルド氏、斎藤氏、平松氏らが取締役に就任。株式のおよそ70%がドイツ(「シモン・エバース商会」を含む)の所有、30%が日本の取締役や年長の従業員の所有であった。

### ● 1938

スタインフェルド氏は事業を再開、二年後に渡米。現在、アメリカ、ニューヨークのトランスオーシャンコマース社社長。





更に国内の化学業界とのビジネスが拡大した。この業務の専門知識は一流のエンジニアリング会社であるドイツのパートナーから得る事ができた。当時ドイツは、特に石炭化学の分野においてリーダーであった。

昭和4年(1929年)レイボルトは株式会社となる。その設立日に撮影された主なメンバーの写真である。後列左より一橋本重役、寺内氏(ビー・シュミッツ商会)、上西氏(建材社)、橋田支配人、富田氏(レイボルト大阪支店)、鹿取氏(レイボルト鉄道関係の専門家)、前列左より一平松常務取締役(大阪支店長)、斎藤常務取締役(ジェー・エム・フォイト部)、ビー・シュミッツ(ビー・シュミッツ商会大阪デマング社代理店)、マイスナー社長、早川氏(株主)、早川氏(株主)

1930年代半ばには、レイボルトの社員は1000名を超えた。東京に大規模な技術部門を置き、創造力豊かな社員のもと、ドイツのパートナーと国内のトップクラスの業者の協力を得て、レイボルトは日本市場で極めて強力な地位を築いた。又、石炭からのガソリンの生産等、国内のあらゆる電力分野において大型プロジェクトに携わった。



レイボルト定款、営業報告書、社則、社員名簿  
昭和15～17年頃

しかし、残念な事に中国における戦争は激しさを増し、ドイツではヒトラーが大きな戦争を押し進め、日本とアメリカ及びイギリスとの状況は最悪となった。

● 1930～1945

取締役の斎藤氏、平松氏、死去。この間にレイボルトは約1000人(含アルバイト)の従業員を擁し、東京と審陽(旧奉天)に自社ビルを構える。22社にも及び日本の製造会社の株を保有するなど、大きく成長し繁栄するが、第二次世界大戦(1941勃発)により事業が崩壊。

● 1946

アメリカ占領軍当局はレイボルトのいかなる社業活動も禁止。

● 1948

クルト・マイスナー氏、アメリカ当局の指示でドイツに送還。



クルト・マイスナー氏と彼の従業員は、1941年の末から始まった第二次世界大戦の中で、1905年以来培ってきた全ての建設的な事業が粉々に崩壊して行くのを見ることになった。レイボルドの工場や技術部門の事務所は爆撃で消失した。

1945年の夏には満州で創り上げた全ての事業・工場等はロシアの手に渡った。大規模な解体が始まり、中国人に残されたものはほとんど何もなかった。中国にいたレイボルドの多くの従業員がシベリアへ連行された。

レイボルドはドイツ系の日本商社として成功を取ってきたが、GHQ(米国占領軍)はレイボルドに日本に於ける業務活動のチャンスを与えなかった。

しかし、クルト・マイスナー氏はサンフランシスコ条約が1951年に締結される以前から会社の再建を開始し、業務を指揮していた。



1945年、伝統の火を消すまいと再び有志が集い、「レイボルド機工株式会社」(以下レイボルド)として社業を再開。かつての社員が次第に復帰して国内の顧客との友好関係が復活した。しかし、誇り高き大日本帝国は日本の長い歴史の中で初めて完全に敗北し、国中が壊滅状態にあり混乱を極めていた。

このショックによって日本国民は国を再建する為に今までとは完全に異なった基準が適用される事を知った。しかし大きく飛躍する為にはかなりのリスクを甘受しなければならなかった。やがて戦後の混乱も徐々に収まり、世界は急速に広がった。

1952年からは最も重要なドイツの工作機械メーカー(SCHIESS社/PFAUTER社/KAPP社/Loewe社/Raboma社/Hueller HiLLe社-ドイツ)から一流の技術者が来日し、長期に渡りその技術指導を受けた。

加工サンプル



ロータ研削盤

### ● 1948~1952

ドイツ人株主の株は没収され、外国との貿易に慣れていない日本や中国の国民に売却された。そのため、レイボルドの各部門の有能な責任者達は辞職し、以下の会社を設立して、そこでこれまでの業務を再び始めた。

- 建材社(現大気社)(空調、塗装業)
- 水道機工株式会社(水道業)
- 日光商事株式会社(織物機械)
- 協北産業株式会社(紙製造機)
- 株式会社OTTO(コークスの炉)
- ドイツ顔料株式会社(顔料、アルミホイール)
- 横手産業株式会社、大阪

### ● 1952

「機工貿易株式会社」として事業再開。「機工貿易」は水道機工の杉浦氏、横手氏、岡田氏らと協力して、谷津氏によって設立された。この会社は、始めは以前の事業の一環であった工作機械の貿易から再開した。清水氏が取締役就任。機工貿易、日光商事、協北産業の買付けは、以前のようにハンブルクの「シモン・エバース商会」を通して行われた。





次々に機械が輸入され、1950年と1960年代のテンポは正に息をのむようであった。いたるところで再建が進み、全く新しい産業が創出された。レイボルドは全く新しい自動車及びオートバイ産業の発展過程のあらゆる段階を経験した。

全く新しい工場と組立ラインが野原の上に建設され、昼夜を問わず稼働し、計画された全ての事が早いピッチで完了した。かつてないスケールと遂行能力であった。

世界のトップランクへの道がこの時始まった。最も効率的な生産方法が世界に実証され、最高品質による記録的な生産が行われた。戦前の安くて悪い日本製の自動車のイメージは払拭された。

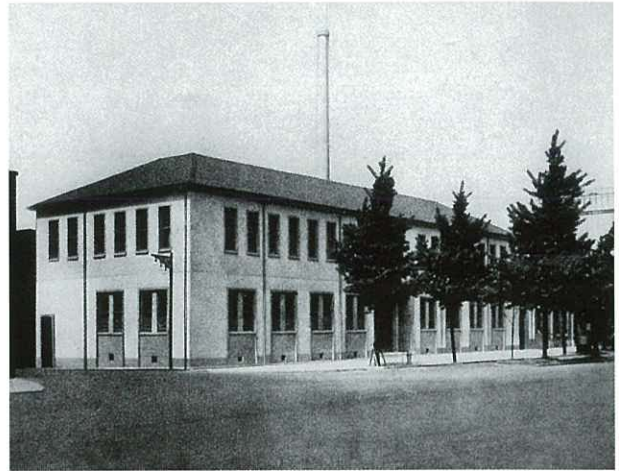
日本の鉄鋼産業も同様の過程を経た。レイボルドはかつての世界には類を見ないスケールの最新鋭の超大型プラントを受注した。

これはメーカー（OFAG-ドイツ）にとっては大きなリスクを伴うものであったが、同時に大きな挑戦でもあった。日本の業者も事業に参加した。プラントは予定通りに納入され、完全に期待に応えた。日本の鉄鋼産業は急速に世界におけるトップの座を占め、低価格で高品質の鉄鋼製品を生産した。

レイボルドは日本の造船業界においても躍進した。遠い将来の為に計画された大型船舶の為の大規模なドックと施設が建設された。顧客から最新、高速、高精度の工場設備を受注、レイボルドが開発に携わり、困難な技術的問題を克服し短期に特許をも申請した。

又、レイボルドはセラミック産業の再建にも携わった。製品は配管器具、耐火レンガ、絶縁体、タイル、研削砥石、磁器等多岐にわたった。

更に、最新鋭の設備をもつ組立ライン、最も近代的なバー



レイボルド株式会社所有別館「八重洲通と仲通りの角にあつて、ドクター・シー・オットー社の炭炭炉部（化工機部）及び水道関係装置部（都市工業部…現在の水道機工株式会社）」当家屋は1945年米軍の爆撃によって破壊した。その廃墟は1960年迄そのまま存在した。

ナーのノウハウによって設計された近代的なトンネルファーンエス（KERABEDARF社-ドイツ）、完全自動包装機械、日本最初のカプセル充填機、検査機（HOEFRIGER社-ドイツ）等の納入も行った。

極めて高い品質の世界水準をいく性能、最も低い生産コスト、更に作業者の大幅な削減が可能となった。

全てが順調に運び、建設が始まるまでに詳細にわたって正確に調整が行われた。

更には日本の造幣局に紙幣を印刷する為の2つの工程を行うコンプリートマシン（KOENIGS & BAUER社-ドイツ）を多数納入した。このビジネスも大成功を収めた。不良率が最も低く世界最高品質で、時間当たり最多の印刷が可能になり、日本の品質基準は確実に世界最高になった。その新しい紙幣（最初の千円紙幣）は美しく実用性に優れ、偽造に対して高度な安全性を備え（JEOLLY社-イタリア）、戦後の日本の経済成長とともに数十年にわたり使用された。

● 1953

クルト・マイスナー氏、ドイツより日本に戻り、「機工貿易」の社長に就任。

● 1954

破産した「レイボルド」の全ての株は、「機工貿易」に買収され、「機工貿易」は社名を「レイボルド機工株式会社」と改め、社屋を1927年から営業所があった東京建物ビルに移転。

● 1955

クルト・マイスナー氏、ハンブルグの大学から名誉学位を受ける。

● 1959

谷津取締役と杉浦取締役（水道機工の社長）死去。第二次世界大戦の終戦まで、東京と番陽（旧奉天）の「レイボルド」にいた松本龍氏が「レイボルド機工」に加わり、谷津取締役の後を継いで常務取締役役に就任。





食酢製造装置



1954年には最新型のファンフォールド印刷機(KROSFIERD社-イギリス)を納入し、エレクトロニックデータ処理とオフィスオートメーションの驚異的な勝利が始まった。

又、レイボルドは食品産業におけるビジネスも再開する事ができた。最新設計による多数の機械・装置(BUCKAU社/PUTSCH社-ドイツ)が北海道のビート工場に納入された。

それらの工場は今日においても最新の工場として稼働している。

日本の食酢の産業においても、全国で革新的な発酵プロセス(FRINGS社-ドイツ)を紹介して、食酢生産の決定的な改良に貢献する事ができた。

食酢の生産者はより良質な最終製品を製造する事ができ、自動化によって生産工程は著しく速くなり、作業員から不快な臭気を取り除く事ができた。更にそれ以来、発酵プロセスを用いて他の食品加工分野においてもこの生産方法に手を加え成功を取めた。又、汚水の生物学的な処理(NOPON社-ドイツ)の分野にも参入した。

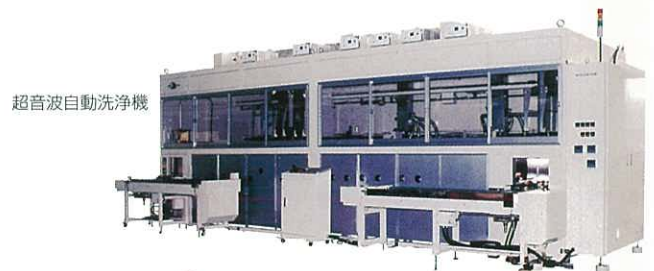
強制処理能力を有する革新的な高圧スチームボイラーのアクセサリーを含む高圧ボイラーポンプ(KSB社-ドイツ)に用いられるフィードウォーターポンプを納入した。これは仲介ライセンスによるものであり数十年にわたり国内の発電所に納入した。



又、他の新しいテクノロジーの市場においても主要な役割を果たし、躍進を遂げた。

近年新しいIT分野となった材料の表面処理技術(SCHLOETTER社-ドイツ)においては、大規模な研究所に各種のテスト機器を有し、多数のスペシャリストスタッフをかかえ、常にビジネスの機会を拓き続けている。

ドイツの一流の専門メーカーと緊密に協力し、半導体産業にも業務を拡大。環境にやさしいコーティングのメッキ浴をIC業界に納入し、メンテナンスを行い、技術革新の最前線に立った。更に他の分野としては、特殊浴を用いたバリ除去方法を用いた表面改良技術(POLIGRAT社-ドイツ)なども、多くの産業において高い将来性が見込まれる。



超音波自動洗浄機



ガラス面取り機ライン

● 1964

ハンス・マイスナー氏、三代目社長に就任。



● 1976

クルト・マイスナー氏、死去。

● 1980

社名を「レイボルド株式会社」に改める。





横浜研究所  
(ジャーマン・インダストリー・センター)

ここ数年にわたり、オプティカルレンズの研磨に用いられる特殊機械のメーカー(中村留精密工業株式会社)と緊密な協力関係にあり、他の装置と取りまとめて、高精度かつ高性能なデジタルカメラ及び携帯電話に装着されるレンズのコンプリートな加工ラインを納入。この分野も海外においても成長が見込まれるビジネスである。

レイボルドは最新のハイテク及びノウハウを新しい分野においても提供し続け、日本とヨーロッパ及び諸外国のパートナーと緊密な連絡を取り合っている。各業界のニーズを先取りし、専門分野における新たな発展を常に追い求めている。



横浜研究所実験室

● 1984

古田登美雄氏が  
四代目社長に就任。



● 1995

高橋優氏が  
五代目社長に就任。

● 1997

岩切廣治氏が  
六代目社長に就任。



● 2005

レイボルド  
創立100周年目を迎える。



# そして、新たなる100年が始まる…

二度にわたる大戦の混乱期には、レイボルドにとって後退を余儀無くされた困難な時代がありましたが、100年に及ぶレイボルドの歴史の後半の大部分にあたる戦後の60年に涉り、日本の産業の発展、そして復興と再建に貢献できた事に大きな誇りをもっています。

1980年、私たちは社名をレイボルド株式会社と改め、  
新たに歩み始めました。

これからも先人たちのたゆみない努力とすばらしい創意工夫に学び、

日本の産業界の更なる発展・成長に貢献するべく、

社員一同全力を尽くしてまいります。

今後とも皆様方からの一層のご支援をいただけますことを、

心よりお願い申し上げます。



レイボルド株式会社



現代の横浜港



現代の神戸港





東京本社(東京建物ビル)



大阪支店



欧州連絡事務所(ハンブルグ)



横浜研究所



上海駐在事務所(昆山)



名古屋支店



群馬保養所(草津)





## レイボルド株式会社

### 東京本社

〒103-0028 東京都中央区八重洲1丁目9番9号  
Tel. 03-3272-1861  
Fax. 03-3281-4490  
E-mail leybold-tyo@msg.biglobe.ne.jp

### 大阪支店

〒532-0003 大阪市淀川区宮原3丁目5番24号  
新大阪第一生命ビル  
Tel. 06-6392-0560  
Fax. 06-6392-0951  
E-mail master@leybold-osaka.com

### 名古屋支店

〒454-0823 名古屋市中川区富船町5丁目1番10号  
Tel. 052-352-5351  
Fax. 052-352-5399  
E-mail leybold-nag@mub.biglobe.ne.jp

### 横浜研究所 ケミカル事業部

〒226-0006 横浜市緑区白山1丁目18番2号  
ジャーマンインダストリーセンター  
Tel. 045-939-7807  
Fax. 045-939-7808  
E-mail leybold-yok@mub.biglobe.ne.jp

### 上海駐在事務所

〒 215316 中国江蘇省昆山市北門路2211號  
Tel. 86-512-5777-8228  
Fax. 86-512-5777-8206  
E-mail leybold-kunshan@pub.ks.js.cn